

「今」こそ考えるべきこと、 すべきこと

震災復興がひと段落し、 未来へ力強く踏み出す年

編集部●まずは、校友の皆さんに新春のごあいさつをお願いします。あわせて、2014年を振り返っていただければ、と思います。

日高理事長●新年明けましておめでとうございます。2014年は、震災からの復旧もひと段落といえるところまでできました。神田は5号館が新しくなり、生田には専修大学国際交流会館が完成しました。現在、さらに予定工事が進められており、キャンパス整備は、着実に進んでいます。教育制度についても、矢野先生を中心に、一定の方向性をつくった年だったと思います。

矢野学長●明けましておめでとうございます。2014年4月から新たな学士課程教育^(※1)がスタートし、2015年は、この次を考えていく年になるでしょう。現在、専修大学には7学部ありますが、学部数や内容が本当に適正なのか、また、法学部だけが神田キャンパスにあ

東日本大震災から、そろそろ4年の時が過ぎようとしている。この間、専修大学や石巻専修大学、校友会では、復興に向けたさまざまな取り組み、活動を行ってきた。それが、新たな段階をむかえそうな2015年、専修大学、石巻専修大学、専修大学校友会の未来を切り拓くために何が必要なのか？ トップ4人に、おおいに語り合っていた。

るという配置でいいのかといったところを、創立140周年、150周年に向けて検討していこうと考えています。

また、2020年には東京オリンピックが開催されるなど、今後はこれまでに以上に国際的なニーズを取り込んだ大学づくりが求められてくると思います。「グローバル化」は、学問領域や産業界など、あらゆる分野でその必要性が高まっていくのは間違いありません。そういったニーズに、専修大学としていかに応えるかについても検討をスタートしたところです。

坂田学長●明けましておめでとうございます。石巻専修大学にとっての2014年は、ポート用語でいうところの「セトルダウン」だったと感じています。これは、スタートでスパートした後、コンスタントペースに落とすことを言います。東日本大震災のあと、なりふり構わずスパートをしてきた状況が少し落ち着き、今後のことも考えながら

動けるようになってきたということですから。

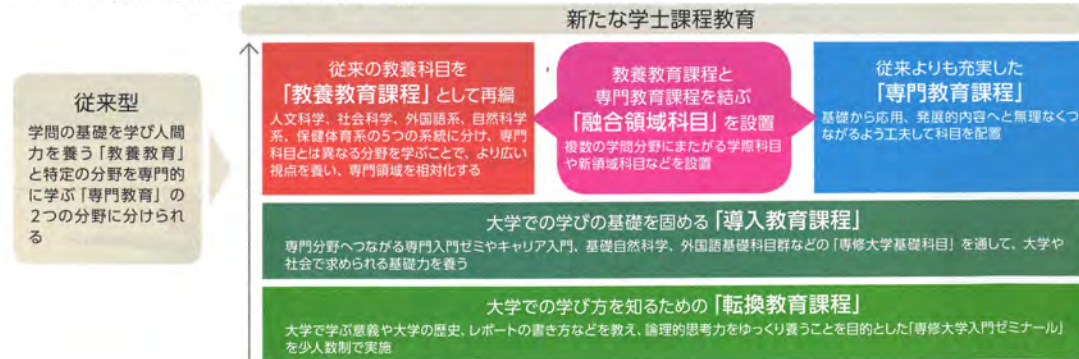
具体的には、平成25年度にスタートした人間学部、理工学部の食環境学科、生物科学科が2年目に入り、3月には学生寮も完成します。また、新たなカリキュラムについて、専修大学の新たな学士課程教育も参考に検討を開始し、29年度から実施する予定となっています。

編集部●校友会について、甘竹会長からお願いします。

甘竹会長●新年明けましておめでとうございます。校友会は、若い人の参加を促すため、数年前から各地域支部の連合の立ち上げに力を入れています。支部単位では1人か2人しか若者がいないとしても、連合という形で集まれば10人、20人と増えるため、若者も参加しやすい環境、雰囲気生まれてくると考えているからです。

2014年11月には、東北の6県33支

※1 2014年4月からスタートした新たな学士課程教育



新たに生まれ変わった5号館



坂田 隆
石巻専修大学長

日高 義博
学校法人
専修大学理事長

甘竹 秀雄
専修大学
校友会会長

矢野 建一
専修大学長

部が集まって初の連合が立ち上がり、北海道から関東、東北、信越、東海、九州と6つのブロックが完成しました。今後は、支部として親睦の機会をつくる一方、連合では若い人向けの企画、イベントを行っていきたくと思っています。そして、支部や連合の活動が、経済行為ができるような校友同士の結びつきを広げ、その中から1,000円でも2,000円でも校友会に、また大学に寄付できる体制に持っていきたいというのが、14年度の反省と15年度に向けてのスタンスです。

校友の皆さんのご協力をよろしくお願い申し上げます。

グローバル人材育成 についても本格検討

編集部●お話の中に2015年に向けての話題が出てきましたので、引き続き、今年、そして創立140周年、150周年に向けたお話をお聞かせください。

日高理事長●やはり大学というのは人間を育てる教育の場ですので、140周年に向けて、社会で本当に活躍している人材にも少し脚光を当て、学生だけでなくOBにも強く発信していくこと

で、我々の方向性をより具体的にしていこう。2015年は、そういう年にしたいと思っています。

また、今後、教育の面で大きな課題の一つとなるのが、矢野先生もおっしゃっていたグローバル化への対応だと考えます。なかでも、今後重要性が増していくのは、アジアの中でのグローバル化に対して、どのように社会知性の開発をしていくかだと考えます。そのことについて考える場合、英語は補助手段に過ぎません。ベトナムならベトナム語、カンボジアならカンボジアの言葉というように、両方をできるようになって、かつ自国の文化的な核を崩さない教育を考えないといけません。

編集部●ここ数年、企業はグローバル化を進め、多くの人材を海外へ派遣していますが、異文化に触れることで萎縮してしまい、期待していた成長が見られないなど、まだまだ多くの課題を解消できずにいます。そのあたりについて、大学でできること、すべきことはあるのでしょうか？

日高理事長●異文化に対応するためには、外から客観的に日本を見られるかどう

かということ、「自分はこうだ」と言えるものがあるかどうかの二つが重要です。この二つができれば、言葉はどうにかります。

矢野学長●グローバル化は大企業だけでなく中小企業へも広がり、当たり前になりつつあります。また、世界が非常に近くなったため、例えば、お金の流れにしても、ギリシャのように、どこかの国がちょっと不調をきたすと世界中が大騒ぎになってしまいます。

このような時代に対応できる学生を育てていくためにも、異文化コミュニケーションとでもいうものを将来的には専修大学も作っていく必要があると思います。非常に大きな柱として。ただそれは、1つの学部をつくるだけではおそらく駄目だと思います。既存の学部にも大きな影響を与えていけるようなものになると、うまくいくんじゃないかなと思っています。まだ具体的なイメージは完成していませんが。

坂田学長●実は地方というのは、「本音のグローバル化」がすでに進んでいます。石巻からちょっと内陸に行けば、外国出身のお嫁さんが普通にいます。毎日同じ空間、地域でご飯を食